

よみがえれ!
有明訴訟弁護団
(後藤 富和)発行
092-512-1636
090-9602-0700

5月開門は可能 事前アセス不要

【サガテレビ・4月20日】諫早湾干拓事業の排水門の開門を求める訴訟の原告・弁護団は政府の検討が大詰めを迎えるなか、今月22日に東京で集会を開き国に5月中の開門は可能として改めて政治決断を迫ることになりました。排水門の開門の是非をめぐっては赤松農水大臣の現地視察を踏まえ、潮受け堤防の閉め切りと漁業被害との関係をさぐる政府・与党の検討委員会が早ければ今月中にも開門の是非について方向性を示すことが考えられます。このため訴訟の原告・弁護団が20日、会見を開いて改めて見解を示しました。弁護団は湾内の漁業者が開門を要望している現状や短期的な開門から実施すれば、すぐにも開門は可能と、引き続き5月ないし6月の開門を国に迫る方針です。また今月27日の政府与党の検討委員会を前に22日には東京で集会や座り込みを行い、国に早期の開門を実施するよう政治決断を求めることとしています。

かたくなな姿勢に不信感 有明海取り戻す第一歩

【長崎・4月11日】よみがえれ!有明海訴訟の原告団長 松永秀則(56)

県などの反対派は「排水門を開けると大変なことになる」と言うが、そんなことはない。反対派は、開門と開門とを常につけて放しの状態の反対している。私たちは極力影響の出ない「段階的開門」を提言しているが、県はその声に耳を貸さずともせず、開門した場合の不安をあおるばかり。けんかするつもりはないが、かたくなな姿勢には不信感を覚える。

県の言う被害は「調整池の濁りが外に出て漁業が駄目になる」「営農の水源に困る」「防災効果がなくなる」といったものだが、心配はいらない。短期開門調査をしたときと同じように、最初の数日は海水交換の量を少なめに抑え、次第に増やしていく方法を取る。調整池内の淡水を徐々に海水に交換し、底質や水質を改善しながら常時開門に移行するので濁りなどの問題は生じず、有明海に悪影響はない。

防災面でも、最初は調整池の水位を現在の標高マイナスイメートルに維持し、対策を取りながら水位を上げていけばいい。そして、台風や高潮が襲うときには閉門するなど柔軟な水門操作をすれば被害は起きない。

営農の代替水源も、干拓地に近い諫早中央浄化センターの下水処理

水を使えばいい。耕作放棄地に雨水などをためる池を造る方法もある。私たち漁業者は、農業が駄目になってもいいとは全然考えていない。共存していく方法はないかと考えているだけなのだ。

なぜ裁判までして開門を求めるか。それが豊かな有明海を取り戻す第一歩だからだ。水質が悪い調整池の水を一方的に出すだけの今の状況こそが環境悪化の根源になっている。私たちは毎年、赤潮被害にびくびくしている。一カ月足らずの短期開門調査のときは一部海域が悪くなったが、その翌年は私の場合にはアサリなどの水揚げが十倍ぐらいいなった。この事実を見ても、有明海再生には開門しかない。

県は有明海の環境悪化について熊本新港や筑後大堰(おおせき)などの影響を挙げ「複合的な要因」とするが、私たちの漁業不振は諫早事業が始まってからだ。年一千万円以上の水揚げがあったタイラギ漁は工事が始まってからできなくなつた。瑞穂や国見の漁民が開門を求める裁判に加わってくれた。それは漁民が原因が諫早だと身をもって分かっているからだ。県はそうした声と真摯に向き合ふべきだ。今の漁業は、国や県からの補助金依存型になってしまった。振興策として海中に空気を入れるばつき装置や覆砂などいろいろやったが、結局は何の効果もない。アサリなどは貧酸素状態で夏場に死んでしまい、年を越せな

い。だから稚貝を買い翌年に備える。それで果たして有明海の漁場が安定してきているとなるのだろうか。有明海の自然の恵みをいただきながら暮らしているといえるだろうか。今、与党で開門の是非が検討されている。ぜひ、漁業者が生き延びる「開門」という良い結果を導き出してもらいたい。

福岡県産のノリ 販売枚数24%減 色落ち

【西日・4月16日】福岡県有明海海苔(のり)共販漁連(同県柳川市)で15日、今季最後のノリ入札会が開かれた。今季の総販売枚数は11億117万3800枚(前季比24%減)、総販売額は109億4371万円(同17%減)で、主力の冷凍網ノリの生産時期に色落ちが長期化した影響が出た。1枚当たりの平均単価は9円94銭(同79銭高)だった。

今季は1月中旬に、ノリが黒く色づかない色落ちが4年ぶりに発生。海中のプランクトンが減少せず、栄養塩が少ない沖合を中心に色落ちが1カ月以上続いたため、ノリ網を一時撤去するなどの対策を取っていた。同漁連によると、ここ数年は販売枚数は15億枚前後、販売額は130億―150億円で推移していた。